

## 歴史講座と老人たち

中 林 幸 夫

(会員 香川県綾歌郡国分寺町)

私の住む町には公民館講座の中に歴史講座があり、講座は一月に一回(二時間)専任講師により行われている。歴史といえば地方の栄枯盛衰の中心になる城と支配者が話題にのぼる。

我々は城といえば天守閣を持つ白亜の城を想像するが、秀吉、家康が全国を制覇するまでの城は山城が多く、館と城が別々に造られていた。

昔の山城は講座で教えられるまで知らないものも多い。

『先生こんな不便な山城の意味は何なんですか?』

『適が攻めてきたとき身を守り、戦うためですよ』

『そのために城は柱を見せず白壁で塗られて、火矢から

守っているのですね、屋根が瓦葺になつているのも火災から守るための方法ですかね』

『そのとおりです』

先生はなんでも知っているというような顔をした。

『城に白壁が塗られたのはいつ頃でしょうか』

『さあ、はっきりはわかりませんね』  
と苦笑いをした。

白壁は石灰がなければ作れない。

私は佐伯にいたとき、海崎の笹良目に小さな城跡のようなものがあり、近くの人に尋ねたら、昔、石灰を焼いていたところだと教えられたことを思い出した。

昔、石灰は特殊な産物で佐伯の輸出品ではなかったかと記録を探したが見つからなかった。

石灰岩を焼いてセメントを作る以前のものかと自分勝手に想像して、日本セメント発足の元ではと考えたりした。

続いて、先生に瓦がネズミ色をしているのを知っていますかと聞くとあいまいなことを答える。

私が松葉を炭状に焼き、粉にして塗っていたというと半信半疑である。

これは私が子どもの頃、近くの瓦屋へ遊びに行つて見たことである。

講座は、時々、現地研修といつて現場へ出かける。

平成十三年十月も現地研修ということでバス旅行に出かけた。(昼食付き二千五百円)

この日の行き先は高知中部と徳島池田方面だった。

途中、高知県立歴史民族資料館に立ち寄ると『長宗我部の栄光と挫折』展が行われていた。

入館して陳列品を

拝見していたら、『佐伯文書』というのが目にとまり見ると、書き出しが、堅田小三郎で始まり……終わりが、佐伯経貞となつているので写真を撮り帰った。

堅田、佐伯とあれば、佐伯市のゆかりのものど頭に浮かん



佐伯文書

だ。

年代は暦応二年と書かれているから、一三三九年のことになる。

佐伯史談一六〇号—一六二号に高知須崎市の野田貞志が『土佐の堅田一族』で書かれているように無縁ではなさそうである。

一四四一年には中国の大内勢が軍船三百余で佐伯市の柏江に上陸、堅田宇山城に押し寄せたが惟世が撃退した堅田合戦というのが行われている。

この頃は、朝廷が南北朝に分かれ、楠木正成、足利尊氏らが全国的に戦乱を起こし、全国各地で戦いを展開していた関係で、中国、四国、九州間でも軍船による往来があったようである。

土佐の堅田一族、佐伯経貞は佐伯市の出とみるのが正しいようである。

長宗我部展では秀吉の命により大友氏を助けるために、四国から援軍を送り、戸次川の合戦で四国勢全滅の悲劇となり、長宗我部軍七百余名も戦死、四国全体では二二七名が戦死したとなっている。

内戦、民族間の血で血を洗う戦いはすさまじいものがあるようである。

各地の田んぼの片隅に石積があるが戦いに破れた人々の亡骸を葬ったようである。

日本は戦後五十年、戦争の無い平和が続いているが、憲法をゆるがす機運が起こりつつある。悲しいことである。

歴史を学び知ることがは平和を守ることに通じるように思えてならない。それなのに歴史講座は老人ばかりで若者や壮年者の顔はない。

学校の教育においても、歴史は数学、国語、英語にくらべると軽んじられているように思われる。

温故知新、平和教育には歴史は大切なように思う。

歴史の語り部が学校を訪問して、戦いの悲劇と平和の大切さを教えられないものだろうか。

佐伯の歴史では梅牟礼城のことは多く語られているが、なぜか、堅田の宇山城については語られていない。

## 江ノ浦越



四浦半島の津久見市江ノ浦越を訪ねてみた。津久見市中心街から千怒、日見、福良を経て、国道二一七号線と分かれて半島北岸道路に入る。地方道四浦一日代線である。網代から江ノ浦を過ぎ、海沿いに赤崎に行く道と分岐して岬を横切る。ここが江ノ浦越。坂を下ったところに同名の江ノ浦越集落がある。

江ノ浦と江ノ浦越の両集落は背中あわせだ。昔は、この両集落を直線的に結んで、高度一二〇メートルの小さな峠があった。もちろん細い道。江ノ浦から山を越えていくので、江ノ浦越という集落名ができたのであろうか。

高度わずか一二〇メートルとはいえ、両集落は直線にして六〇〇メートルしかないもので、坂はきつい。そこで新しい車道はこの峠を見すて、北の山をぐるりと回って行くことになった。ここに新しい江ノ浦越が生まれたわけである。

江ノ浦越を地元の人はエンダゴエという。エノウラがエノラと略され、さらにラ行とタ行の転移でエンダとなったらしい。

この峠路と、ここからさらに北に延びる岬は、赤江漁港を分ける。入江ではハマチの養殖。峠の直下ではし尿処理場の建設が進んでいる。見はるかせば保戸島、無垢島、高島、そして遠く四国の佐田岬。

この地方道は、まだ鳩浦までしか出来ていない。さらに久保泊、落ノ浦へと延びるときはさらに新しい峠が生まれるだろう。(峠シリーズ(15))・大分合同新聞・昭和五十三年五月十二日版